国立ハンセン病資料館
資料館だより

2022.7.1 No.116（季刊）
編集　国立ハンセン病資料館
発行　公益財団法人笹川保健財団

目次

P1 企画展「生活のデザイン」8月31日まで！夏休み中の関連イベントのご紹介
P2 開催報告　ギャラリー展「いのちの森に暮らす」
P2 2022年度マスコミ向けセミナー開催報告
P3 収蔵資料の保存管理　文化財害虫から資料を守るために
P3 研究から　入所者・退所者等の語りを残すこと
P4 夏休み子どもむけイベントのご案内
P4 お知らせ／利用案内

企画展「生活のデザイン」8月31日まで！夏休み中の関連イベントのご紹介

企画展「生活のデザイン　ハンセン病療養所における自助具、義肢、補装具とその使い手たち」は、いよいよ残すところ約２ヵ月となりました。アンケートでは「患者、回復者の創意工夫と力強さを感じた」「使い手と作り手の声が良い」などご好評をいただいています。

本号では関連イベントをご案内します。今年の夏休みの計画に加えてみてはいかがでしょうか。

■ギャラリートーク

ギャラリートーク（対面）

担当学芸員による展示解説を、対面・オンラインで行っています。道具の使い方や特徴、自助具の背景にある使い手の暮らしや願いについて、担当者ならではの視点でご案内します。対面：7月23日(土)・8月28日(日)、オンライン：8月31日(水)各13:00～

■トークセッション「生活のデザイン」をめぐって

オンラインミュージアムトーク2022の企画展関連回として6月17日（金）に開催しました。当館初の夜間イベントで、展示解説（収録）と、担当学芸員２名によるライブ対談を組み合わせ、定員一杯ご参加いただきました。展示制作の過程で気づいた、小さな自由への切実な思い。近日、アーカイブ動画を公開予定です。

■ワークショップ「ブリキの義足を作ってみよう」

療養所における義肢装具の象徴といえば、本展ポスターでも大きく取り上げた「ブリキの義足」です。実はこの義足、患者による製作指南が残っています。ワークショップではこの記録をもとに、厚紙やウレタンなど身近な材料で「ブリキの義足」を作ります。実際に手を動かし、シンプルな形に込められた工夫や願いについて考えてみましょう。（対面）

■講演会「生活のデザインができるまで―願いをかたちにする人びと―」（オンライン）

会期終盤には、国立療養所多磨全生園の義肢装具士、後藤直生（ごとうなおき）さんと菅野太洋（すがのたかひろ）さんをお招きします。現役で、かつ豊かな経験をお持ちのお二人に、使い手との丁寧な対話を通じて「生活のデザイン」が作られていく様子をうかがいます。菅野太洋（すがのたかひろ）さん：7月31日（日）・後藤直生（ごとうなおき）さん：8月6日（土）　いずれも13:30～。

各イベントとも参加無料、定員あり。オンライン企画は事前申し込みが必要です。詳細は資料館公式ホームページ等をご確認ください。

皆様のご参加をお待ちしております。

（西浦直子）

「生活のデザイン」公式HPはこちら

開催報告　ギャラリー展「いのちの森に暮らす」

厚生労働省が2009年より定め、毎年６月22日に施行される「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」（以下、「追悼の日」）に合わせて、当館ではギャラリー展「いのちの森に暮らす」（会期：６月10日～６月30日）を開催しました。本展は東村山市と共催し、多磨全生園入所者自治会と国立療養所多磨全生園の協力を得て、以下の目的で企画されたものです。

最初に「追悼の日」に関する周知と理解を促すこと。次に新型コロナウイルス感染対策のため園内の史跡等の見学が困難な状況において、その姿を伝える機会とすること。最後に、東村山市における国立療養所多磨全生園のあり方を示し、かつては隔離政策が行われた場所である同園が、入所者による医療と生活の向上を求める活動の拠点となり、加えて現在では回復者が暮らし、さらに自然に溢れた人権と共生についての地域の学びの場でもあると伝えることです。

この目的に沿って、国立療養所多磨全生園に暮らす回復者たちの姿を撮影した宇井眞紀子（ういまきこ）氏の写真18点、回復者が植樹した桜、紅葉に囲まれた納骨堂、雪が降り積もった山吹舎など、同園の四季を捉えた広瀬敦司（ひろせあつし）氏の写真21点、加えて同園の歩みを示すため、過去の多磨全生園（第一区府県立全生病院）の写真６点（当館所蔵）を合わせて展示しました。

「追悼の日」及び、地域における多磨全生園の意義についての解説パネルも会場に設置し、隔離政策による被害、さらに「人権の森」構想等について考えを深める場となりました。

（吉國元）

会場の様子

2022年度マスコミ向けセミナー開催報告

６月３日（金）、メディアにおいてハンセン病問題が取り上げられる機会の増大を目的として、テレビやラジオ、新聞記者などメディア関係者を対象としたセミナー「報道と差別を考える－マスコミとハンセン病問題－」を開催致しました。本セミナーは、会場（日本財団ビル）での現地参加とリアルタイムでのオンライン配信参加のハイブリット式での開催としたため、遠方の方も含め、多くの方にご参加いただくことができました。

当日は当館企画・制作のビデオ「知っていますか？ハンセン病問題」の上映と、ハンセン病問題について多くの報道を行ってきた、RSK山陽放送アナウンサーの米澤秀敏（よねざわひでとし）氏による、自身の取材経験談を元にした講演を行いました。

米澤氏は講演で、RSK山陽放送の40年以上にわたる長島愛生園、邑久光明園、大島青松園の３園への報道史を自身の取材経験も交えながらご説明してくださいました。取材に関わっていく中での入所者や世間の心情や関わり合い方の変化、入所者との交流の中で生まれたエピソード等についてもお話いただき、現場を経験した米澤氏ならではの貴重なお話を聞ける機会となりました。

セミナーの最後の時間に設けられた質疑応答の時間では、多くの質問や感想が寄せられ好評でした。参加者の皆様にとって米澤さんの経験談は、ハンセン病問題だけでなく新型コロナウイルスなどの感染症や差別問題について取り上げる際のあり方にも、参考になったのではないでしょうか。

（牛嶋渉）

収蔵資料の保存管理
文化財害虫から資料を守るために

当館には、前身の高松宮記念ハンセン病資料館設立の際に多磨全生園の入所者が全国から収集した資料をはじめ、開館から現在にかけて収集してきた数多くの貴重な資料が収蔵されています。

ハンセン病問題を後世に語り継いでいくこれらの資料を適切な環境で保存管理していくためには、虫による被害の対策も欠かせません。

当館は豊かな自然に囲まれており、さまざまな生物が暮らしていますが、なかには、明るい場所や温かい場所を求めて館内に入ってくる虫やトカゲもいます。

当館では、昆虫などが館内に入らないよう、外に通じるドア近くに爬虫類除け剤の配置や害虫除けスプレーの散布を行い、昆虫の進入を阻む虫よけブラシをドアに設置しています。とはいえ、昆虫の進入や発生を完全に断ち切ることはできません。そのため、館内の各所に歩行性昆虫と飛翔性昆虫用の２種類の捕虫器を設置し、年間を通して、どの時期のどこにどのような昆虫がいるのかを知る目的で、館内昆虫生息調査を行っています。

外から迷い込む昆虫の中でも、資料の保存管理をする上で問題となるのは、文化財や歴史的な資料を加害する「文化財害虫」です。当館で補虫される大半は、ゴミダマシムシやコバエなど、文化財害虫ではありませんが、まれに衣類などに害を加えるカツオブシムシや、高湿度を好みカビをえさとするチャタテムシなどの文化財害虫も補虫されます。補虫が確認されると、その地点を中心に清掃をするなどの対策を取ります。

幸いなことに、これまでのところ文化財害虫による問題は起きていません。これからも良好な資料保存環境を維持できるよう、虫菌害対策を行っていく予定です。

（星野奈央）

館内の捕虫器を確認する

研究から
入所者・退所者等の語りを残すこと

マイクを前に語る柴田すい子さん（写真左）

当館では、ハンセン病問題の解決の促進に関する法律第18条の規定に基づく普及啓発をいっそう推進するため、厚労省が実施するハンセン病資料館等運営企画検討会における提言に基づき、ハンセン病問題を風化させないための事業として昨年度から数年にかけて当事者（入所者・退所者・家族）の証言を映像で残すことを計画し、実施しています。

昨年度は、国立ハンセン病療養所多磨全生園の入所者の平沢保治さんと、退所者の柴田すい子さんの証言を記録しました。

平沢さんには、当館の前身である高松宮記念ハンセン病資料館の設立に尽力された方のひとりとして、設立に向けた当時の活動や周囲の人びとの反応、これからの資料館への想いなどを語っていただきました。また、長年にわたり資料館の語り部として多くの方に自身の経験を伝えるなかで、主に重点を置いてきた子どもたちへの啓発活動の成果や、次世代を担う子どもたちへのメッセージを語りました。

柴田さんには、多磨全生園に入所後、入所した子どもたちが集団生活を送る少女舎で体験した苦労や、社会復帰を決意し、ハンセン病の後遺症で下がった足を矯正する手術を経て社会復帰をした経験などを語っていただきました。また、ハンセン病国賠訴訟に原告として参加したきっかけや、裁判が進むなかでの心境の変化などについても語りました。

今回撮影した映像は、テーマごとに数本に分けて編集し、一般の方だけでなく、学校現場や各機関の研修等でご活用いただけるよう、後日YouTubeにて配信を予定しています。ぜひご覧ください。

（橋本彩香）

☆…☆…夏休み子どもむけイベントのご案内…☆…☆

当資料館でハンセン病問題を学び、人権について考える夏休みにしませんか。
詳細は当館ホームページをご覧ください。

7/30・8/14
ワークショップ（対面）参加無料
企画展「生活のデザイン」関連イベント
「ブリキの義足」を作ってみよう
【会場】当館１階 ロビー
【所要時間】10：00～11：30（約１時間30分）
【対象】小学生以上　小学生の方は保護者同伴
【定員】各回申込み先着５組まで１組あたり３人まで

7/22・7/24・7/28・8/7・8/13
ワークショップ（オンライン）参加無料
「ハンセン病資料館で学ぶ　はじめての多磨全生園」
【会場】ハンセン病資料館常設展示室より配信
【所要時間】各回10：00～11：00（約１時間）
【対象】小学４年生～６年生の児童およびその保護者
【定員】各回最大20組

☆お家学習に役立つ当館公式HPキッズコーナー☆
（小学校中学年～中学生向け）
・かんたん解説…はじめてのみなさんへ資料館紹介
・かたりべチャンネル…語り部紹介、動画教材DL
・Q&A…なぜ？なに？を解決する
・もっと知りたい…参考になる本・DVDの紹介
・資料ダウンロード…パンフレットのDL

（千代倉裕子）

https://www.nhdm.jp/kids/
キッズコーナー

お知らせ

■「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」式典開催（2022年６月22日）

ハンセン病の患者であった方々の追悼、慰霊および名誉回復のため、2009年度から、「ハンセン病療養所入所者等に対する補償金の支給に関する法律」の施行日である６月22日が「らい予防法による被害者の名誉回復及び追悼の日」と定められています。式典の様子は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため出席者を限定し、インターネットにより生配信されました。

利用案内

■開館時間　９：30～16：30

■団体で学習する（10名様～70名様）
10名様以上でご来館の団体向けに、ガイダンス映像視聴、語り部講演映像視聴、見学前ガイダンス（約15分）、展示自由見学などから構成される団体見学プログラムをご用意しております。

■オンライン団体見学プログラム（10名様以上）
通信アプリ【Zoomミーティング/Google Meet】などを使用した、10名様以上の団体でご利用いただける、オンラインのプログラムをご用意しております。ハンセン病問題に関するガイダンス映像や語り部講演映像の視聴、展示室からのライブによる資料紹介と質疑応答などを組み合わせてご利用いただけます。
団体見学プログラムお問合せ先：group@nhdm.jp

■休 館 日　毎週月曜日（祝日の場合は開館）
年末年始、国民の祝日の翌日、館内整理日

■入　　館　無料

■交　　通
・西武池袋線 清瀬駅南口より
西武バス「久米川駅北口」行バスで約10分
（「ハンセン病資料館」下車）
・西武新宿線 久米川駅北口より
西武バス「清瀬駅南口」行バスで約20分
（「ハンセン病資料館」下車）
・ＪＲ武蔵野線　新秋津駅より
徒歩約20分

〒189-0002 東京都東村山市青葉町4-1-13
TEL 042-396-2909　FAX 042-396-2981
URL https://www.nhdm.jp/